

論者有記

「野球道」の再定義



編集委員

絶対服従からリス・ペクトへ

西村 欣也

「スポーツマンシップ」を中核に置き、「絶対服従」の代わりに「指導者と選手のリス・ペクト（尊敬）」を据えるべきだと説く。

飛田穂洲という人物をご存じだろうか。1886年生まれで早稲田大学の野球部に入り、監督も経験。朝日新聞記者としても活躍した。その評論は大きな影響力を持ち、「学生野球の父」と呼ばれる。

彼の理論は今なお生きている。「野球道」とも呼ばれるその考え方に、異を唱えた人物がいる。巨人で活躍し、ピッツバーグ・パイレーツでメジャー野球も経験した桑田真澄氏だ。

早大大学院の社会人1年制コースを首席で卒業し、最優秀論文賞を受賞したのが「『野球道』の再定義による日本野球界のさらなる発展策に関する研

究」だ。その作成過程について担当教授だった平田竹男氏と対談した「野球を学問する」（新潮社）を出版した。

飛田の「野球道」は「精神の鍛錬」「練習量の重視」「絶対服従」で成り立っている。武士的野球と呼ばれるが、これには暴力が伴う。桑田自身、「小学生の時からグラウンドに行っただ殴られない日はなかった」と述懐する。PL学園時代も同級生で1年生から4番に座った清原和博はホームランを打つたびに、「また先輩にしばかれる」と泣きながら塁を回ったというエピソードも紹介されている。

桑田論文は野球道の代わりに

この論文を書くに当たって、桑田は現役プロ野球選手270人からアンケートをとっている。「指導者から体罰を受けたことがある」は中学で45%、高校で46%。「先輩から体罰を受けたことがある」は中学36%、高校51%。かなりの高率だが、さらに驚くのは体罰について「必要である」、「時には必要である」を合わせると中学でも高校でも83%の選手が体罰を容認しているのだ。

負の連鎖をどうやって断ち切れたいのだろうか。

ヒントはある。京大アメリカンフットボール部の水野弥一監督と対談した時だ。彼は言った。「うちでは、雑用は全部4年生にやらせます。トイレ掃除も。おまえたたちが一番強いんだろう。一番勝ちたいんだろう。なら一番嫌な仕事をやれ、と教えます」。逆転の発想で体罰はなくなっていく可能性がある。

今なお、体罰という暴力がなくならない日本のスポーツ界。リンチで死者まで出した大相撲も、「かわいがり」と呼ばれるいじめが消えたとは思えない。その暗部をえぐってみせた桑田論文は貴重である。その実践には、体罰は犯罪であるという当たり前のことを、指導者に徹底していくしかないだろう。